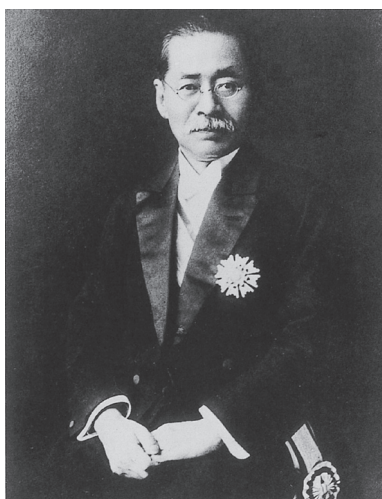


## 表紙の解説 最終回「日本近代眼科の始まり—河本重次郎とその時代—」

谷原 秀信



（「東京大学医学部眼科学教室百年史」より許諾を得て転載）

図1 河本重次郎の肖像

### はじめに

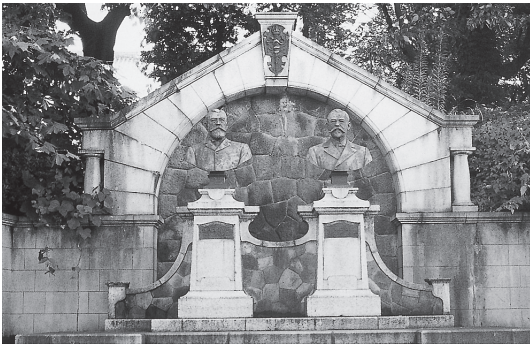
表紙シリーズ「一葉の写真」は、当初より1年間の連載と考えておりました。そこで予定通り、今回をもって最終回とさせていただきます。本シリーズでは、できるだけ歴史的な考証を踏まえて、執筆することを意図しておりましたので、当事者やその関係者の証言を確認しやすい明治期を中心として題材を選んでおりました。その中で、日本近代眼科の確立において中心人物となるのは、東京大学の初代眼科教授となり、膨大な数の門弟を育成した河本重次郎です。したがって、本シリーズの最終回を飾るには、河本重次郎についてまとめることで、日本の眼科において、彼が果たした役割を解説しておくこ

とが相応しいと考えました。さらに河本重次郎を中心として、本シリーズで言及した眼科医たちのかかわりについても“総集編”として整理し、日本眼科の歴史の中で、河本重次郎の果たした役割を明確にしておきたいと思えます。今回、表紙に掲載した写真は、言うまでもなく河本重次郎の肖像です(図1)。

### 河本重次郎の生涯

河本重次郎の経歴については、「河本重次郎傳」「河本重次郎 回顧録」「東京大学医学部眼科学教室百年史」「日本眼科学会百周年記念誌」などの記載から抜粋いたします。

河本重次郎(図1)は、安政6年(1859年)旧暦



(「東京大学医学部眼科学教室百年史」より許諾を得て転載)

図2 東京大学に設置されているスクリバとベルツの胸像

8月15日(新暦では9月11日)、兵庫県城崎郡豊岡本町において、但馬国豊岡藩の京極家に従士として仕えた河本齋助の長男として誕生しています。河本齋助は、京極家で六石二人扶持の徒頭支配を務め、明治3年には9等15石の俸を受けています。彼は、小藩における一介の従士に過ぎませんから、けっして裕福な家庭ではありませんでした。少年期の河本重次郎にとって不幸であったのは、慶応2年(1866年)、重次郎が幼少のうちに、生母の八重子が逝去していることです。その後、父齋助は出石の原家から後妻を迎えますが、彼女も7年ほどで河本家を去ります(後年、東京遊学中の重次郎がこの第二の母を慕って、折々に訪れていたそうです)。次いで、第三の母となる壽賀が河本家の三男清を産むのですが、この清は後年、眼科医となり、重次郎が設立した河本眼科病院を継承する運命にあります。

旧幕時代、父齋助が江戸藩邸に在勤することが多かったために、祖父筑右衛門が重次郎少年の幼少期の教育を受け持ち、厳しく躰けたといわれます。さらに、河本重次郎が7歳になってからは、藩校である稽古堂に入って初期教育を受けます。この時期は、論語、孝経、孟子などの漢学の教養を学んだようです。その後、明治維新を迎えて、明治4年(1871年)、廃藩置県

により藩校は閉鎖されます。さらに明治5年(1872年)、当時14歳になっていた河本重次郎少年は、父の意向に添って、慶應義塾を卒業して教鞭をとっていた吉村寅治郎が上京する際に、彼の一家に同伴して東上することになります。この東上は、父齋助の実弟である中江種造(当時、横浜にあった大蔵省金銀貨幣分析所に勤めていました)の計らいによるといわれています。この叔父の采配によって横浜にあった高島学校のドイツ学科に通学し、その後は、叔父が大蔵省を辞し、東京に移ったのに伴い、東京外語学校に移ります。

明治8年(1875年)、河本重次郎は、東京医学校(後の東京大学医学部)予科に入学し、ドイツ語の習熟に加えて、算術、幾何学、物理学、化学などの講義を受けます。河本重次郎が医学校に入学するに際しては、大恩ある叔父中江の勧めがあったようです。明治10年(1877年)、東京医学校は、東京大学医学部と改称されますが、翌明治11年、河本重次郎は、予科を卒業して、本科に入学します。当時、東京大学で眼科学を教えていたのは、シュルツェやスクリバです(図2)。河本重次郎が入学した頃、シュルツェが外科学と眼科学を併任していましたが、当時の学生からの信望が薄く、衝突を起こしていたと記録されています。他方、明治14年、シュルツェの後任として招聘されたスクリバは、無邪気な陽性の性格で、手術も得意であったといわれています。学生時代の河本重次郎は、決して経済的に恵まれているわけではありませんでした。郷里の父や在京の叔父からも学費は支援されておらず、学生に給されていた毎月5円の給費で生活していたといわれます。前述のごとく、小藩の貧しい徒士の家で育った境遇が、彼をして困苦欠乏に耐える強固な意志を築かしたものであろうと、「河本重次郎傳」でも指摘されています。

明治16年(1883年)、河本重次郎は、東京大

学を首席で卒業することになります。この際、同期の友人の中には北里柴三郎がおりました（本シリーズ「第1回 森鷗外と北里柴三郎、河本重次郎—学問的対立と学閥、そして友情について—」参照；本シリーズについては、以下同様に回数と表題を表記します）。河本重次郎は、卒業後、外科学教室の助手となり、スクリバに師事します。河本が外科学を当初志した理由は、外科学を教導していたスクリバの人柄を河本自身が好み、またスクリバからも学生時代から可愛がられていたためであると「回顧録」に記されています。ただこの処遇は、経済的には、決して恵まれたものではありませんでした。当時、医学校を卒業した者たちは、高額の給与で地方の病院長や医学専門学校の教師として雇用されることが多かったことから、河本重次郎が薄給の大学助手となったことに、父齋助は、薄給に甘んじる我が子の処世を懸念していたといわれています。

河本重次郎は、翌明治17年、そのような薄給による質素な生活の中で、加藤香芽子（当時19歳）を娶います。夫人は、但馬国出石の藩士植松三武郎の三女として誕生しましたが、父三武郎は、明治4年（1871年）の廃藩置県による混乱の中で没します。それ以後、寡婦となった香芽子の生母は、幼児を抱えて惨憺たる困窮の中で奮闘し、我が子を養育することになります。そして香芽子は、幼少期に、同じく出石藩士であった加藤正矩の養女となります。加藤正矩自身は上京し、新知識を吸収して教育者となり、新潟師範学校長などを勤め、東京に戻ってきておりました。そこで偶然、旧豊岡藩士であり河本齋助や中江種造と懇意にしていた知人が、植松家の親戚筋にも当たり、その縁で両家の間を取り持って、二人の結婚に至ったということです。ちなみに、この時、河本重次郎は、嫁となる香芽子を一見すらせず、叔父中江種造の判断で、香芽子との結婚を決めたという古風な逸話

が残っています。いずれにせよ、河本重次郎の縁組は、東京大学を卒業した苦勞知らずのエリートが令嬢を娶るという華やかなものではありません。小藩の貧しい武家に誕生した者同士が、幼少期に経済的な困窮や片親を失うという同じ苦勞を味わったうえで、かろうじて学問で身を立て、貧しくささやかな家庭をようやく築いたというべきものでした。ただし東京大学を首席で卒業し、スクリバに愛でられた河本重次郎には、それなりの自負があったに違いありません。また加藤正矩の実兄は、後年、帝国大学総長となる加藤弘之（男爵に任ぜられます）ですから、偶然の結果とはいえ、河本重次郎は、帝国大学閥における中心人物の係累に連なることになりました。

明治18年（1885年）、新婚時代の河本重次郎の人生に大きな転機が訪れます。初代眼科教授と嘱望されていた梅 錦之丞が宿痾の結核に倒れ、若くして逝去したことを受けて、同年、外科学ではなく眼科学を研究するためにドイツ留学を命じられるのです（「第5回 夭折した或る眼科医の記—梅 錦之丞の生涯—」参照）。そして同年12月にフランス汽船ダイナス号により、ヨーロッパへ旅立ちます。恩師スクリバの紹介で、まずドイツのフライブルグ大学マンツ教授に師事します。その後、ヴェルツブルグ大学、ベルリン大学を廻り、北欧から南欧にかけて歴訪して、診療や研究の現場を視察します。当時の世界的権威であったヒルシュベルグ、ウイリヒョウ、パナス、ウエッケル、ランドルトなどと交流しました。結婚して間もない妻香芽子は、養父加藤家に身を寄せることになりました。

明治22年（1889年）6月1日、河本重次郎は、4年間にわたる長い留學生活を終えて、帰国します。そして同年10月1日には、帝国大学医学部教授に任じられます。つまり、正式に東京大学（帝国大学）の初代眼科教授となったのです。2年後、明治24年に医学博士の学位を取得し





(「東京大学医学部眼科学教室百年史」より許諾を得て転載)

図3 河本重次郎の海外視察(明治40年)

ています。わが国における多彩な眼疾患の論文報告を行い、さまざまな診療・検査の器具を開発し、多様な手術を執刀し、「国手無双」(「史記 淮陰侯伝」において韓信を評した“国士無双”という讃辞の言語遊戯でしょう)とまで讃えられた圧倒的な権威と実力を周囲に見せていたといわれます。また明治30年(1897年)、日本眼科学会創立とともに、その会長に就任します(大正14年までその職にありました)。同時に、「日本眼科学会雑誌」を刊行しています。日本人の眼科に関する学術論文を翻訳し、海外の眼科学会に送付したり、論文を発表させたりすることで、日本眼科の学術的貢献を広く世界に知らしめる活動を積極的に行っていました。明治38年(1905年)、日露戦争においては、陸軍衛生補助員として傷病兵の診療を行っています。明治40年(1907年)より約1年間、再度ヨーロッパを歴訪しています(図3)。そして大正5年(1916年)、勲1等瑞宝章を受勲されています。大正11年(1922年)に定年退職して名誉教授となり、後継を石原 忍に委ねますが、在任期間33年にわたる教授職を勤め上げて、九百名超といわれる膨大な数の門弟を育成しました。東京大学教授として診療を行うとともに、麹町富士見町にて河本眼科病院を開院しており、こちらでも三百数十名といわれる多数の弟子を育てています。このような圧倒的な実績で、河

本重次郎は、「日本近代眼科の父」と称されるようになります(図4)。そして大正14年(1925年)、世界的に貴重なヒルシュベルグの蔵書を購入して、東京大学に寄附しました。このように、河本重次郎の経歴と業績は、明治～大正期の日本近代眼科そのものであると言っても過言ではありません。河本重次郎は長寿を全うしたのですが、持病の喘息に苦しんでおりました。昭和13年4月4日未明、河本重次郎は、喘息発作が増悪した後、病状が急変し、家族が駆け寄る中、静かな臨終を迎えます。享年80歳でした。

### 日本における眼科の黎明と停滞

歴史家の共有する認識として、眼科学の黎明は、古代インドに生じたと考えられています。実際、古代インドにおいて薬物療法と手術療法の発達が生じ、特筆すべきは、眼科領域における腐蝕、焼灼、切開、穿刺などの外科技術が発達したことが指摘されています。そして水晶体の形態を正確に理解して、手術的に白内障を墜下せしめる術式を、この時期に完成させているのです。その後、中近東や中国を経由して、これらの眼科診療の概念と技術は、大陸から日本に輸入されていきます。日本における先駆者は、醫王山薬師寺(尾張国馬島村)の馬島清眼であり、彼の門下によって継承されていく馬島流です(「第9回 日本で最初の眼科専門医—馬島清眼と馬島流について—」参照)。中国由来の医療技術が徐々に伝播していく中で、諸流派が派生していきます。江戸期の医学的な権威者は、江戸幕府お抱えの奥医師であり、全国諸藩の藩医でした(第8回「戦国武将の眼病事情」参照)。しかし、一子相伝や厳格な師弟間の秘密主義で閉ざされた当時の医学では、学問としての発展を期することができませんでした。日本においても江戸時代後期まで、さしたる改良はなされ



(「河本重次郎傳」より引用)

図4 河本教授東大在職25年祝賀会(大正3年)(第二列中央が河本教授夫妻)

ず、ひたすら前例を順守し、追隨するのみであったようです。

この事情が大きく変わるきっかけは、江戸時代後期にみられた蘭学の勃興であり、それによる西洋医学に附随した科学思考の輸入です。特に江戸中期、大きな影響を日本医学界に与えたのは、有名な前野良沢と杉田玄白による「ターヘル・アナトミア(解体新書)」の翻訳でした。前野良沢や杉田玄白は、明和年間(1770年前後)には、同書を入手しており、実際に小塚原刑場での腑分け(解剖)を見学したことで、その記載内容の正確さに衝撃を受けました。その後、彼らの翻訳(完全な逐語訳ではなく、いくつかの洋書による知識が混在しているといわれています)が流布することで、全国の医家が影響を受けます。このように幕府の限定的な容認の下、長崎経由でさまざまな経路により蘭学が輸入されていくこととなります。

江戸期の身分制度は、医学のような専門職については、意外と融通無碍なところがありました。その隙間を縫って、立身した代表が土生玄

碩です。土生玄碩は、このような時代の中、当時の日本の眼科における権威者達からの学問における自由な情報伝達の阻害に苦慮しながらも、眼科医としての名声を得ます。彼は、また日本における実験眼科学の先駆者でもあるとみなされており、眼球の解剖やある種の動物実験などを行っています(「第4回 男の花道—土生玄碩とシーボルト事件—」)。このような土生玄碩の来歴が、蘭学の権威者として、大きな影響を江戸後期の医家たちに与えたシーボルトに対する憧憬の根源となると同時に、シーボルト事件に連座する契機ともなるのです。また幕末期の馬島流において、第28代当主であった圓如僧正も長崎に遊学して、西洋(オランダ)医学の眼科学を習得して、馬島流のさらなる発展を成し遂げました。かくして、江戸時代後期に至って、ようやく現在の科学的手法に相通じる概念が、発達してきたといえます。

西洋医学の背景にある科学思考を受容したことは、ある意味で、天地が一変するような大きな転回点に遭遇したようなものであるといえま

す。したがって明治政府によって推進される西洋医学の輸入は、明治維新後に突如として出現した事態ではありません。さらに強調しておきたいのは、専門職としての医業が成立していく中で、江戸期を通じて、全国に、医学を血脈（あるいは養子縁組や師弟関係を通じた疑似血族）で継承していく家系が多く存在するようになっていたことです。幕末期から明治初期にかけて、藩医や代々の医家の家系に誕生した者たちが、明治維新によって、劇的に輸入促進された西洋医学の先駆的な受容者となり、日本における近代医学を構築していくことになります。本シリーズで取り上げた諸家においても、馬島家は言うに及ばず、土生家（「第4回 男の花道—土生玄碩とシーボルト事件—」）、梅家（「第5回 夭折した或る眼科医の記—梅 錦之丞の生涯—」参照）、佐藤家、須田家、井上家（「第6回 ライバル達の相剋—井上達也と須田哲造—」参照）、行徳家（「第7回 地方の雄—行徳健男と行徳眼科—」参照）などが該当します。河本重次郎が権威者となる以前の近代眼科を形作ることになるのは、このような連綿と継承されてきた医家の出身者であったことは特筆すべきことでしょう。

## 東京大学の成立と名称の変遷

明治維新では、1867年（慶応3年）の大政奉還、それに続く江戸幕府の廃絶によって王政復古がなされます。いわゆる廃藩置県は明治4年（1871年）に行われています。同年はひとつの転換点であり、いわゆる岩倉使節団として、岩倉具視を正使として、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文らの政府首脳陣と留学生を含む総勢100名以上の大規模なメンバーが、アメリカからヨーロッパ諸国を廻ります。これによって、江戸幕府により締結されていた不平等条約改正の予備交渉をするとともに、欧米文明の視察が

なされ、明治政府の目指す国体に対して大きな影響を与えることになります。しかも明治6年（1873年）の使節団帰国後、留守政府の中心人物であった西郷隆盛らの征韓論と激突して、政変が生じ、明治10年（1877年）の西南戦争に至ります。そして、西南戦争の終結により、ようやく政権基盤が安定して、強固な近代国家としての歩みが本格的に始まります。

東京大学の成立に限定して歴史的経緯を整理すると以下ようになります。明治2年（1868年）、明治政府は、旧幕府から継承した儒学中心の昌平坂学問所（昌平黌）、洋学の開成学校、西洋医学の医学校の3校を統合し、官立教育機関（「大学校」）を設立します。同年、大学校は、「大学」と改称され、医学を担当していた医学校は、以降、大学東校（本校であった昌平黌の東に位置していた）と呼ばれるようになります。その後、明治3年（1870年）、明治政府が洋学中心の施策を打ち出すことで、国学者・漢学者が反発して紛争となり、大学本校は閉鎖され、医学を担当した大学東校は、単純に「東校」と呼称されるようになります。当初はイギリス医学を中心としていましたが、当時のドイツ医学の隆盛とドイツ（プロシア）君主政体に対する（明治政府高官らの）親和感もあって、ドイツ医学への転換が政府方針として決定され、明治4年（1871年）、プロシアから軍医であったミュルレルやホフマンが招聘されます。さらに同年、東京医学校と改称されます。そして西南戦争が勃発する明治10年（1877年）、最初の官立大学として、正式に「東京大学」という名称が制定されます。

明治19年（1886年）、帝国大学令が制定され、これに基づいて、帝国大学と改称されます。明治30年（1897年）、京都帝国大学が設置されたことによって、帝国大学令に基づく大学が複数存在することになり、それ以降は、「唯一の」帝国大学は、「東京帝国大学」と改称されます。



明治時代初期には、大学の権威はさほどではなく、むしろ各種専門学校や私塾の卒業生、あるいは各省の専門官僚養成学校に優秀な学生が集まっており、東京(帝国)大学の権威が確立されたのは、帝国大学に改組され、官僚任用に帝国大学卒業生が優遇されるようになってからであるといわれます。その後、太平洋戦争(第二次世界大戦)を経て、昭和22年(1947年)の新制大学への移行で、現在の「(新制)東京大学」に至ります。

### 河本重次郎教授着任以前の状況

河本重次郎は、日本近代眼科の構築に関するグランドデザインを描いた人物です。当初、唯一の帝国大学眼科の主宰者として、そして彼の圧倒的な学術業績と巨大な門下を統率したことで、当時の著名な眼科医たちは、直接間接を問わず、彼の影響下にありました。本シリーズで言及した眼科医たちと河本重次郎の交流を整理することで、河本の存在感と日本近代眼科の成り立ちをあらためて確認したいと思います。

本シリーズでも以前に言及したように、東京大学が成立した明治10年頃には、西洋医学の教育は、主として外国人の教師陣に依存していました(「第5回 夭折した或る眼科医の記—梅錦之丞の生涯—」参照)。明治政府の方針で、ドイツ医学へ傾斜した後、ドイツ圏から招聘されたシュルツェ、スクリバラが眼科を指導し、梅錦之丞、須田哲造、井上達也などが育成されました。上記のごとく、明治10年(1877年)、正式に東京大学が発足しますが、梅が東京大学に入学したのがその翌年である明治11年(1878年)です。西南戦争を終結させ、政権基盤を固めた明治政府が外国人教師依存から脱却して日本人教師による高等教育へと舵を切って、官費留学生派遣を再開したのが、明治12年(1879年)であり、梅錦之丞は、その第一陣としてド

イツ留学するのです。ただし、この頃は試行錯誤の留学再開初期であり、必ずしも絶対的なアカデミアのキャリアとして確立されていたわけではないことに留意しておく必要はあるでしょう。

一方、明治13年(1880年)、東京大学では、井上達也が眼科助教授となって、「我が世の春」を謳歌しているのですが、2年後の明治15年(1882年)には須田哲造が東京大学に帰学して、井上達也が入れ替わるようにして、大学を辞することを余儀なくされます(「第6回 ライバル達の相剋—井上達也と須田哲造—」参照)。しかし、それとても翌明治16年(1883年)、梅錦之丞が帰国するまでの暫定的な対応に過ぎなかったといえます。井上達也と須田哲造が確執を感じていた当時、既に世の趨勢はドイツ留学経験者に委ねられることが決定されていました。唯一の想定外の出来事は、梅錦之丞が病に倒れたことでしょう。梅が帰国した同年、河本重次郎は、前述のごとく、東京大学を首席で卒業しています。後年、東京帝国大学では、成績優秀者に対して、天皇からの褒賞として懐中時計(いわゆる「金時計」なのですが、実際は銀時計であったようです)が授与されました。河本の卒業時には、そのような「銀時計」の授与制度はありませんでしたが、首席卒業生として、将来を嘱望されていたことは間違いありません。卒業後、スクリバラの下、外科学教室の助手となっていることから彼の幹部候補生としての立場は明確です。しかし、梅錦之丞が病没したことで、急遽、眼科教授たるべく、眼科へ転向することを要請されたのでしょうか。明治18年(1885年)、4年間に及ぶ長いヨーロッパ留学に旅立つことになったのです。河本が留学していた明治19年(1886年)、帝国大学の成立と梅の夭折が同時に訪れます。この時期には、既にアカデミアの権威者としてのドイツ留学経験者と帝国大学教授の立場が確立されており、河本

の留学については、明確な幹部候補生(教授候補)のキャリアコースであったと考えるべきでしょう。実際、帰国した年に、直ちに帝国大学教授に着任していることは、その考えを裏付けています。他方、熊本から「地方の雄」行徳健男が帝国大学選科に入学した明治21年(1888年)は、梅錦之丞の没後、河本重次郎が帰国し、帝国大学教授となる明治22年(1889年)以前に当たります(「第7回 地方の雄—行徳健男と行徳眼科—」)。この頃は、教授不在の時期を、甲野<sup>たすく</sup> 隼を助教授として暫定的な体制でしのいでいたと思われます。

### 河本重次郎の教授時代と近代眼科の成立

明治22年(1889年)、河本重次郎が帝国大学教授に就任し、眼科を主宰します。いよいよ河本重次郎の時代が始まったのです。これ以降、著名な眼科医は、直接、間接にかかわらず、なんらかの形で、河本重次郎の傘下に入ることになっていきます。軍医であった石原 忍は、陸軍の指令によって、大学院に入学して、河本重次郎の主宰する眼科で研究に従事します(「第2回 伝統の継承と一新 トップ交代に伴う組織改革と重圧について」参照)。彼は、河本の後継教授を務めることにはなりますが、河本に対して、非常な気遣いをしていたことが記録されています。独学で名古屋帝国大学の学長にまで立身出世したといわれる小口忠太も、須田哲造や井上達也などの指導を仰ぎながらも、明治26年(1893年)、医学部聴講生として河本重次郎に師事しています(「第3回 男子の本懐 小口忠太の一生」参照)。行徳健男は、前述のごとく、河本重次郎とはすれ違うタイミングで熊本へ戻るのですが、河本門下の高弟であった豊田虎之進(熊本医学校、後日の熊本大学医学部、の初代眼科教授)の下で講師を務めますので、間接的には河本門下に組み込まれていきます(「第7

回 地方の雄—行徳健男と行徳眼科—」)。井上達也や須田哲造らは、もちろん河本重次郎以前の東京大学眼科の首脳陣であり、河本の教授就任以前に大学を辞していますが、彼らの子弟は、東京大学で眼科を学ぶことになります(「第6回 ライバル達の相剋—井上達也と須田哲造—」参照)。独立独歩の人、大西克知は、河本に師事することはありませんでしたが、河本重次郎と同じ船でドイツ留学を果たしており、日本眼科学会の創立や日本眼科学会雑誌の刊行にあたって、常に河本重次郎の下風に立つ態度を示し、けっして河本を軽んじる動きはしませんでした。大西克知、須田卓爾、川上元治郎、宮下俊吉、保利真直、桐淵道齋らのお歴々が、逡巡する河本重次郎を説得し、彼から会長就任の了承を得られるまでは、日本眼科学会創立に踏み切れなかったのです(「第10回 日本眼科学会の創立—大西克知の奮闘—」参照)。さらに河本重次郎と世界の権威者たちの間にみられた国際交流は、ヒルシュベルグの蔵書購入やアクセンフェルト来日などに結実していきます(「第11回 戦争に翻弄された眼科医たちの軌跡」参照)。

河本重次郎が絶対的な権力と権威を行使し得た由縁は明確であると考えます。第一に、ヨーロッパ留学で培われた実力、第二に、帝国大学眼科の主宰者としての権威、第三に、長い教授生活で育成した膨大な数の門弟です。これらの理由の背景には、河本重次郎が長寿を全うしたことが最も重要で、個人的には、彼の長寿こそが根源的な権力と権威の源であるのではないかと推測するのです。彼が権威を維持し続けた歲月の長さこそが、膨大な数の門弟を育て、巨大樹の枝葉が茂るような大きな人脈ネットワークを全国にわたって構築し、その中核に河本重次郎が君臨し続けることになったのではないのでしょうか。しかし、その絶対的な権威が、日本の近代眼科を停滞させなかった点は留意しておくべきでしょう。もちろん現在の感覚からいえば、



過剰な権威や学閥的な思考が、学問の自由闊達な進歩を抑制する傾向がなかったとは言えません。実際、戦前までの諸学会は、今では信じられないような閉鎖的な雰囲気があり、「白い巨塔」と揶揄されても仕方ない出来事が多く存在したといわれています。しかし江戸時代以前の旧態依然とした眼科学の停滞が驚くべきほどの長い歳月に及んでいた状況と決定的に異なるのは、グローバルな情報の伝播、オープンな意見交換が可能な学会の存在、そしてなによりも科学的検証を常に要請する近代医学の精神が広く浸透したからに他なりません。河本重次郎により、日本眼科学会の設立によって討論可能な環境が整備され、日本眼科学会雑誌の刊行によって論文発表の媒体が作られ、日本における眼科研究が世界に向けて紹介されつつ、海外人脈との交流を通じて世界に向かう日本人眼科医の意識が喚起されることになったのです。河本重次郎と彼の率いた一門は、日本近代眼科の成立に重要な基盤のすべてを構築したと言って、過言ではありません。そして、その学問の本質を違えなかった赫々たる成果は、河本重次郎という人物の心の持ちようが大きく影響していると考えています。

## 河本重次郎という人物

「河本重次郎傳」の中で関係者によって語られる河本重次郎の人物像には、人生の辛さも哀しさも十分に弁えた「鷹揚で心優しい人格者」の風情があります。東京大学を首席で卒業した河本重次郎は、薄給を気にせず、スクリバの下で助手として母校に勤務しています。また留学から帰朝した際には、愛宕下に洋館を借りて住んでいたのですが、この時、明治23年(1890年)に長男重雄が誕生しています。帰国直後でもあり、その頃の河本家の生活には経済的な余裕がなかったようなのですが、質素な生活に慣

れた彼には、決して苦ではなかったそうです。ところが、この長男が、不幸にも腎臓疾患を患い、翌24年(1891年)に亡くなってしまいます。長男の葬儀に必要な費用50円を工面するために、この時ばかりは、河本自身が「空前絶後」と評したような苦しみを嘗めており、長子を失った痛手とともに、それを永く忘れることができなかったと言っていたそうです。その後、富士見町に転居し、そこで河本眼科病院を開院するのですが、最盛期には「一箇年平均五千人」といわれる患者を診療します。これ以降、彼が経済的な苦勞をすることはなくなります。さらに帝国大学教授に就任した大学のほうでは「八千人前後を数えた」膨大な数の患者を診療していたそうです。

河本重次郎については、その手術の素晴らしさを讃える記録が数多く残されています。さらに加えて、彼の教育者・学者としての際だった資質についても、多くの関係者が指摘しています。たとえば、独学の天才であった小口忠太は、「初代の教授は歸朝後豊富なる材料の下に他から教はつたのみでなく、自ら工夫をこらして専門學科を創立した。先生は傑出したるその一人である」と恩師を評しています。さらに「わが國の學界を見わたして博覽強記の典型的人物といへば、私は正に河本先生はその一人者であると考へてゐる」(越智貞見)。「先生の御講義特に臨牀講義は常に當意即妙、人をして啞然たらしむることがしばしばあり、それがまた又妙に記憶を深からしむるものがある」(鹿兒島 茂)などという讃辞が関係者から寄せられています。

また河本重次郎の人物像として挙げられる特性は、正直であり率直であったことです。「この率直は常に公平・寛大・同情心を伴ひ、人の嫌がることをしつこく言つたり、人を悪しざまに非難したりすることはなかつた」と評されています。実際、「先生はその服装等に無頓着であつたやうに、その言行に修飾されるところが

なかつた」という言葉が、弟子である宮下左右輔によって述べられています。しかし、その率直な言動が人を傷つけることがなかったのは、面白味に富み、おおらかで温かい人柄であったからだと思われれます。このような河本重次郎の人物像は、次世代の眼科を率いた錚々たる諸家によっても、さまざまな形で語られています。そのいくつかを以下に引用します。「先生は非常に頓智に富んでをられました。大きな人格の人でもあられたが、頓智に非常に富んでをられた」（土生 敦）。「学校では六かしい顔をしてをられたが、一日の仕事がすんでからの先生は實に好々爺で全く他愛もなく話されるのであつた。大抵毎日の世界の大勢を論じ、古今の學者や偉人を品騰し、日の暮れるまで快談される。それを私どもは無上の樂みとしてをつたのであつた」（杉田 直）。「河本先生は弟子思ひであらせられた・・・（中略）先生は御自分の弟子の誰はどこにゐてどんな様子かを一々御記憶になつて、様子をたづねられたり語られたりなすつた。恩師に對する私たち弟子の方ではづかしくなるくらゐである」（五十嵐 力）。「更に先生は親切第一に弟子を導かれました。導かれた人々は篤学秀才のみに限られたる次第でもなく、その反面にはむしろ可愛さうな弟子だ、憎めない青年醫家なりと思はれた意味も多分に存在したのでありまして、私だけは確實にその部に屬したのであります」（大野新吉）。

河本重次郎の博愛主義については、「己に薄く他人に厚いといふことを主義としてゐた」といわれます。また帝国大学教授となり、河本眼科病院の隆盛を迎え、河本重次郎の後半生は、経済的に恵まれているのですが、「家庭生活は質素で贅澤や華美をいたく嫌悪した」と記録されています。これは、敬虔なキリスト教徒であり、良き伴侶として内助の功を果たしたと評される妻香芽子にとっても、喜ばしいことであつたと思われれます。さらに河本重次郎自ら「吝嗇

家」と回顧録に記するように、浪費を賤しむ一方で、貧しい境遇の人々への同情の念が厚く、「困つてゐる患者などには、診察室の廊下で人に知れぬやうに、そつと金を恵んでをらるるを私はたびたび見た」と門下が記しています。また河本重次郎の後継者となる石原 忍は、葬儀において医学部長として、河本に対する弔辞を述べますが、その中で「御自身に對しては全く謹嚴でつつまじやかでありましたが、他人のためには財を惜みませんでした」と述懐しています。

### おわりに

日本における近代眼科の創始を成し遂げた河本重次郎の生涯の事績と人物像は、「日本近代眼科の父」と評されるのに相応しい素晴らしいものです。近代国家としての日本が成立するのに呼応して、日本の近代眼科が形成された草創期に、河本重次郎のような指導者を持ち得たことは幸運なことであつたと考えます。しかし、この明治期の偉大な眼科医の精神を築き上げたのは、幕末期の武家が貧窮と混乱の中で与えた教育であり、志操だと考えます。そして彼が外国人教師の下で学び、異国の地で発展させた新しい学問体系は、帰国後にさらなる発展を遂げつつ、膨大な数の門下に受け継がれていきます。「鷹揚で心優しい人格者」に率いられた日本の近代眼科は、彼の門下によって全国に展開され、やがて世界に向けて羽ばたいていきます。河本重次郎が没した後も、彼が残した近代眼科は、日本の浮沈につれた時代の変遷を経ながらも発展を続け、現在における我々の世代に受け継がれています。その潮流が形成されていく過程には、有名無名を問わず、多くの眼科医が寄与したはずで、我々自身も、いずれは昔日の記憶となって、歴史の中に埋もれていくはずで、しかしそれでも、日本の近代眼科は、学問の系

譜を織り成しながら、今後も一層の発展を遂げつつ、次世代に向けて連綿と継承されていくことになるのです。

今回で、表紙シリーズ「一葉の写真」は終えさせていただきます。『眼科』誌の編集委員の一人として、日本眼科の先達の生涯について、尊敬の念をもって、解説したいと願っておりました。先達の事績に向けての解説は、得てして興味の乏しい「詳細な履歴」に陥ってしまいやすいことが残念で、できるだけ一次史料を渉猟することで、先達を感じたであろう喜怒哀楽を含めた人間像に迫りたいと思いました。生涯にわたって、順風満帆な人間など、あるはずがありません。それぞれの時代と立場で、現在の我々と同様に、喜びがあり、哀しみがあり、苦悩があったはずです。1年間12回の連載記事を通じて、そのような感傷を共有していただけた読者の方が一人でもおられたら、筆者としては有り難く感じます。

(謝辞に代えて シリーズを終えるにあたって、引用・参照させていただいた先達による日本眼科の歴史研究に敬意を込めて言及させていただきます。日本眼科の歴史については、20世紀初頭の富士川 游、小川剣三郎などが詳細な調査と解析を行っており、その後に見られる文献的研究は、多くはこれらが樹立した理解を基盤としてなされているように思います。特に、「日本醫學史」(富士川 游著)、「稿本 日本眼科学史」(小川剣三郎著)、「日本眼科全書 第1巻 眼科史」(福島義一、山賀 勇共著)など

は、眼科の歴史を学ぶ上での必読書ですので、ご興味のある方は是非、お読みください。近年では、中泉行正、奥沢康正、三島濟一などの諸先生による論文、著書が発表されており、眼科医側から見た眼科の歴史について詳述されています。特に、近年、三島濟一によって英文書籍として、大作「The History of Ophthalmology in Japan」(2004)が刊行されています。さらに明治期以降の歴史と史料については、三島濟一が主導し、馬嶋昭生が委員長を務めた日本眼科学会百周年記念誌編纂委員会によって作成された「日本眼科学会百周年記念誌」において、詳細な史料が整理され、現在の日本眼科の基盤を構築した先達たちの歴史が編纂されています。さらに、幕末から明治期にかけての著明な眼科医については、本シリーズでも何度も引用させていただいた「眼科醫家人名辞書」(奥沢康正、園田真也共編著)、「医界風土記」(酒井シズ監修)がしっかりとした考証に基づいた記述がなされています。そして諸大学眼科学教室の同門によって刊行されている多くの書籍がありますが、その中でも「東京大学医学部眼科学教室百年史」「熊本大学眼科百年史」は、多くの箇所でも引用させていただきました。これらの著作に敬意を表しつつ、ご助言、ご支援を賜りました諸先生には深く感謝する次第です。なお、本シリーズでは、原則として敬称略とさせていただきますことをお断りしておきます。)

〔谷原秀信：熊本大学大学院生命科学研究部眼科学分野〕

\*

\*